敦賀論叢（敦賀女子短期大学紀要）第十号　抜刷
一九九五年十二月二十五日発行

荀子の言語論

内田慶市

荀子の言語論

内田慶市

はじめに

それぞれの国の言語を研究していく場合、言語のもつ普遍性ということから、いわゆる一般言語学の理論によって、その国の言語を研究していくことも一つの方法ではあるが、個別的な言語には、それぞれにその特殊性があるのであり、個別的な言語の特徴を明らかにしていくことによって、言語一般の普遍性をも明らかにしていくという方法もまた、当然認められていいはずである。そうした立場に立つとき、その国の人々が、その国の言語を、どのようにとらえ、どのように研究してきたかをみていくことは、必須の事柄となってくるのである。

国語学の分野で、このような仕事を成しとげ、その結果として、言語過程説という秀れた言語理論を生み出した時枝誠記博士は、次のようにのべている。

物みな蘇るといふ氣運の中で、私もまた末梢的な研究を捨てて、學問上の根本問題を思索するやうに奮立てられた。それは國語研究の根本に横たはる「言語の本質は何か」の問題であった。私は、この問題を解決するために、先づ我々の先覺者達が、國語を通して言語を如何なるものと考へたかを知らなければならない。そこにこそ我々が言語を、また國語を如何なるものと考へるべきかの足場があるに違ひないと考えた。（「國語學史」）

國語學の體系は、國語現象の理論的體系であるといはれる以上に、その根本の意味においては、研究者が國語について發見した事實の整理統一であり、換言すれば研究者の國語に對する意識の整理統一であるといふことができる。（中

略）私は私の國語に對する眼を明らにするために過去の學者が如何に國語を意識したかを探索する必要を感じた。（中略）國語學の眞義が、國語意識の理論的體系であるとするならば、國語學史は國語意識の展開の歴史であるといふことが出來、我々が、この過去の展開を繼承して、新しい發展を試みるところに、今日以後の國語學が建設せられべきではないかと考へたのである。（『同上』一一～一二頁）

英語学の分野でも、意欲的にこの仕事に取り組み、その中で、変形文法に対する根源的批判や、ポール・ロワイヤル文法、ロックの言語論の再評価といった注目すべき成果をあげ、今後の更なる理論的深化を期待されながら逝った畏友宮下眞二も次のように述べている。

英語学史および言語学史の考察を了えてみると、はじめの目的（変形文法の流行の史的背景の考察）が達成されたばかりではなくて、それに伴って二つの本質的には、はじめの目的よりも重要な成果を得ることができた。第一に、これまでの様々な学説の生成死滅の原因を探ることによって、英語研究上の問題点（言換えれば学問上の躓きやすい点）が明らかになった。第二に、様々な学者の学説（言領えれば彼が英語をどう考えたか）を検討することは、取りも直さず英語の性格を考察することに他ならず、いやでも英語と直接取組まねばならなかった。英語研究上の問題点とは、英語の性格の反映に他ならないから、第一の点も要するに英語の性格の考察ということになる。従って、英語学史の研究は、英語を研究するための一つの方法として必須のものであると言える。（『英語はどう研究されてきたか』一二八頁）

このように、国語学や英語学の分野では、いわゆる「言語学説史」という仕事は、大きな成果をあげているのであるが、中国語学の分野では、あまり行なわれていないようである。今後、中国人が、言語をどのようにとらえ、どのように研究してきたかの考察を、押し進めていかなければならないわけであるが、その手始めとして、今回は、『荀子』の「正名篇」にみられる言語論について以下述べていくこととする。

なお、テキストは、王先謙撰『荀子集解』（藝文印書館、中華民国六二年九月三日版）を用い、日本語訳に際しては、金谷治訳注『荀子（下）』（岩波文庫、一九七六）と、『中国古典文学大系(3)』（平凡社、一九七五年）を参考にした。

一、言語の目的について

荀子は、言語の目的について、次のようにのべている。

異形離心交喻、異物名實玄紐、貴賤不明、同異不別、如是則志必有不喻之患、而事必有困廢之禍、故知者爲之分別制名、以指實、上以明貴賤、下以辨同異、貴賤名、同異別、

如是則志無不喩之患、事無困癈之禍、此所爲有名也、（六七六～六七七頁）

異なれる形には、離なれる心にて交に喩れば、異なれる物の名と實と玄紐し、貴賤明らかならず、同異別たれず。是くの如くなれば、志に必ず喩られざるの患あり、事に必ず困癈の禍あらん。故に知者は、之が爲に、分別し、名を制めて、以て實を指し、上は以て貴賤を明らかにし、下は以て同異を辨ず。貴賤明らかにて、同異別たれ、是くの如くなれば、志に喩られざるの患なく、事にも困癈の禍なし。此れ爲に名ある所なり。

〔いろいろ異なった形の物に対して、人々がそれぞれに別々な心で勝手に理解することになれば、さまざまな事物についての名称とその対象物が混乱し、結ぼれあって、貴賤の区別も、同異もはっきりしなくなる。そうなると、精神面ではお互いに理解できないという弊害がおこり、事業面でも困窮し、失敗するという禍いがおこってくる。従って、ものごとを区別し、名称を制定して、それによって対象物を指示して、貴賤や同異の区別をはっきりさせるのである。貴賤や同異の区別がはっきりすれば、先にのべた弊害もなくなってくる。これが名称を必要とする理由である。〕

又、次のようにも述べている。

名也者、所以期異實也、（六八六～六八七頁）

名なるものは、實を異するを期する所以なり。

〔名称とは、対象物を区別することを目的とするものである。〕

彼名辭也者、志義之使也、（六九〇頁）

彼の名辭なるものは、志義の使なり。

〔名辞というものは、心の意味を伝えるための使いである。〕

荀子は、言語（荀子のいう「名」或いは「名辭」とは、「名称」「名辭」とか訳されるが、この場合「言語」と読替えても差支えないと思われる）の目的として、ほぼ二つのことを述べている。

一つは、「上以明貴賤、下以辨同異」というように、「ものごとを区別するため」ということであり、一つは「如是則志無不喩之患」というように、「人間の意志の伝達のため」ということである。後者は、言語の目的として、全く本質をついたものであり、前者も又、特に、「固有名詞」などを思いうかべれば、的を得た妥当なとらえ方ということができる。言語が、「ものごとを区別するため」にあるということについて、現代の言語学者も次のようにのべている。

新しい固有名詞の誕生は、新しい事物を他のものと区別するためのものである。（中略）この世界は、どこまで行って

も、対象の差異を認めてそれを区別して扱わなければならないような構造を持っている。（中略）対象の差異を認めて区別するとすれば、そのための語彙が出現するわけであって、この意味ですべての語は差別語だということになる。

（三浦つとむ『言語学と記号学』三〇五～三〇七頁）

荀子が、言語の目的の一つとして、「ものごとを区別するため」ということをあげたのは、「上以明貴賤」というように、身分制度・君臣関係などを建て直し、固定化しようとする儒家的発想に規定されているとはいえ、別の角度からいえば、あくまでも言語の基盤を現実の世界（対象）に置いたことの表れであるということができ、そのことが、彼の言語論には強く反映されていることは、以下に述べる中でも明らかにされるはずである。

二、対象を「種類」という面でとらえることについて

言語は、絵画や写真など他の表現と同じく、対象―認識―表現という過程的な構造をもっているが、言語が他の表現と異なる大きな特徴は、「概念」とよばれる対象を「種類」としてとらえた認識を、それに対応した音声や文字で表現するというところにある。三浦つとむ氏は次のように述べている。

ことばの場合には、耳にきこえたり目に見えたりするありかたを無視して、その基本的なあり方をとりあげます。犬の場合なら、「特定の動物」としてとりあげて、ほえる声や毛の色や大きさに関係なく同じ種類の動物だと思えば、同じことばを使い、山の場合なら、「土地の高くなっているところ」としてとりあげて、そのかたちや雪のあるなしに関係なく同じ種類の土地のありかただと思えば同じことばを使います。このような基本的なあり方をとりあげた認識を概念とよぶのですが、ことばはこの概念を示すところに特徴があります。（『こころとことば』一〇頁）

時枝誠記博士も、又、同じことを述べている。

言語が、特定個物を一般化して表現する過程であるといふことは、言語の本質的な特徴である。（『國語學原論』八八頁）

さて、荀子は次のように言っている。

凡同類同情者、其天官之意物也同、故比方之疑似、而通、是所以共其約名以相期也、（六七七頁）

凡そ同類・同情なる者は、其の天官の物を意（はか）るも同じく、故に之を疑似なるものに比方（くらべ）て通ずるなり。是れ其の約名を共にして相ひ期する所以なり。

（一般に物の種類や性状の同じものに対しては、人々の天官（五官）の感じ方も同じであり、それ故それらと他の類似したものを比べ合わせて（一括した名称をつくって）通用させるのであり、これが取り決めた名称を共通にして互いに理解し合える理由である。）

又、楊倞の注に次のようにある。

同類同情、謂若天下之馬、雖白黒大小不同、天官意想同類、（六七七頁）

同類・同情とは、天下の馬、白黒大小同じうせずと雖も、天官其の同類と意想するが若きを謂ふ。

「相類や性状が同じというのは、馬を例にすれば、それに色の白黒や形の大小はあっても、天官はそれを同じ種類と感じるということである。」

この楊倞の注を援用していえば、荀子は、ここで、「対象の感性的な在り方に拘わらず、天官が同じ種類に属しているとみなせば、それに同じ名称をつけて通用させていく」ということ、つまり「対象を種類の面で把らえて表現する」という言語の大きな特徴について述べているということができる。

ところで、荀子はこの所で、人間の知覚作用と、認識作用の違いについても述べている。

心有徵知、徵知則緣耳而知聲可也、緣目而知形可也、然而徵知必將待天官之當簿其類、然後可也、（六七九頁）

心に徵知有り、徵知は則ち、耳に緣って聲を知れば可なり。目に緣って形を知れば可なり。然らば而ち、徵知なるものは、必ず天官の其の類を當簿するを待って然る後に可なり。

「心には徵知というのがある。徵知は耳によって音声を知れば働き、目によって形を知れば働く。つまり徵知とは、天官が新しく感得した類別を、以前に感得したものと引合わせるという操作を経てから始めて働くのである。」

すなわち、「天官」（五官）が物事の違いを知覚し類別し、その後で「徵知」つまり認識作用が行なわれて、概念が形成されるということになる。

三、言語は社会的な約束の上に成立する

言語は、概念という対象の感性的な在り方を捨象して、種類の面で把らえた認識を、文字や音声という感情的なかたちを創造することによって表現するものであるが、この場合、文字や音声の感性的な在り方自体は、言語としての表現ではなく、やはり、その種類としての面が、言語としての表現に他ならない。このようなことから、対象の感性的な在り方と表現形式（文字や音声）の在り方とは、直接の関係をもっていないのである。

しかし、又、一方、言語の感性的な在り方は、言語としての表現ではないから、どんなものを選んでも自由だといっても、「どの概念には、どのかたちのものを使うか」という社会的な約束（規範）がなければ、混乱してしまう。つまり、言語は、あくまでも社会的な約束の上に成り立っているということになるわけである。

このようなことについても、荀子は、次のように明らかにしている。

名無固宜、約之以命、約定俗成、謂之宜、異於約、則謂之不宜、名無固實、約之以命實、約定俗成、謂之實名、（六八二頁）

名に固宜なし。之を約して以て命く。約定まって俗成れば、之を宜と謂ひ、約に異なれば、之を不宜と謂ふ。名に固實なし。之を約して以て實を命く。約定まって俗成れば、之を實名と謂ふ。

〔名称にはもともと定まった意味というものはない。約束によって命名されただけである。約束が安定して習俗にまでなれば、それを意味といい、約束に違うと、意味を外れているということになる。又、名称にはもともと定まった実体（対象）はない。約束によって命名されるだけである。約束が安定して習俗にまでなってしまうと、それを実名というのである。〕

荀子は、ここで、「名無固實」ということ、つまり、「名」（この場合、特に「言語の形成」まで含めたものと考えてもよい。）と「實」（対象）とは、直接の関係を持たず、それは「約之以命」ということ、つまり、社会的な約束の上に成り立っているということをはっきりと述べているのである。

四、「単名」「兼名」「共名」「別名」について

荀子は、

單足以喻單、單不足以喻則兼、（六八一頁）

單にして以て喩るに足れば則ち單とし、單にして以て喩るに足らざれば則ち兼とす。

〔単名で十分理解できれば、単名とし、それで不十分であれば兼名とする。〕

といい、又、楊倞の注に、

謂若止喻其物、則謂之馬、喻其毛色、則謂之白馬黄馬之比也、（六八一頁）

ただ其の物を喩るには、則ち之を馬と謂ひ、其の毛色を喩るには、則ち之を白馬黄馬と謂ふの比の若きを謂ふなり。

〔たとえば、ただその物を理解させる場合には、馬といい、その毛の色まで理解させる場合には、白馬とか黄馬とかいうようなことである。〕

とある。

この「単名」と「兼名」の違いは、一概念を表現するのと、更に別の概念を付け加えて表現することの違い、つまり、「単語」と「複合語」の違いといってよいであろう。

次に、荀子は「共名」ということをのべている。

單與兼、無所相避、則共、（六八一頁）

單と兼と、相ひ避くる所無くば、則ち共とす。

〔単名と兼名が同類であれば、共名にする。〕

この「単名」「兼名」と「共名」の違いは、つまり、個別名と

普遍的な事物を問題にしているのに対し、「共名」という場合には、或る類としての普遍性を備えている事物全体を問題にしているという違いである。例えば、「この万年筆は書易い」というときの「万年筆」（単名）や「この赤い万年筆」というときの「赤い万年筆」（兼名）と「万年筆が普及している」というときの「万年筆」（共名）の違いである。

荀子は、「共名」について、更に次のように述べている。

萬物雖衆、有時而欲徧舉之、故謂之物、物也者大共名也。推而共之、共則有共、至於無共、然終止、（六八一頁）

萬物は衆しと雖も、時有って之を徧舉せんと欲す。故に之を物と謂ふ。物なる者は大共名なり。推して之を共にし、共なれば則みまた共とし、共とすることなきに至って、然る後に止まる。

（万物は多くあるが、時にはそれを総称したいときもある。そこでそれを「物」と名づける。「物」は大共名である。個々の名称をひっくるめて共名にし、共名にかればまたあわせてそれより大きい共名にし、遂にはそれ以上合わせることができなくなったところで止まる。（それが大共名である。））

これは、つまり類とよばれるものも多種多様であり、たとえば「万年筆」の類、「鉛筆」の類から更に「筆記用具」の類、それより高い類の「文房具」の類というように、「より低い類から、より高い類へと、対象の立体的な構造をたどって認識が発展していき、抽象のレベルが高くなっていき、」（三浦つとむ『認識と言語の理論』第一部、九二頁）それぞれに名称を与えていくということを述べている。人間の認識はもちろん、この逆つまり、高い類から低い類へと、具体的な方向へと発展していく。

荀子は、このことを「別名」とよんで説明している。

有時而欲徧舉之、故謂之鳥獸、鳥獸也者、大別名也、推而別之、別則有別、至於無別、然後止、（六八一～六八二頁）

時有って之を徧舉せんと欲す。故に之を鳥獸と謂ふ。鳥獸なる者は、大別名なり。推して之を別ち、別となれば則ちまた別ち、別つことなきに至って然る後に止まる。

（時には、万物を一つ一つ示したときもある。その時には、「鳥」とか「獣」とか命名するのである。「鳥」とか「獣」というのは大別名である。一つの名称をおし分けていって、別名とし、更にそれを小さい別名とし、ついにそれ以上分けることができなくなってそこで止まる。（これが大別名である。））

荀子の「共名」の説明は、次の三浦つとむ氏の説明と比べてみれば分かるように、実に人間の認識の発展過程を的確に把えていたことの表われであるということができる。

われわれの認識は、具体的な方向にもまた抽象的な方向にも発展する。実践がそれを要求するのである。言語で表現

するときには、対象を種類としてとらえて概念をつくり出さねばならない。個別的な事物も、それをある種類に属するものとして普遍的に把握する。食用にする水の中の諸動物を種類として「魚」とよぶなら、これは「虫」や「鳥」に対してその特殊性を把らえて区別しているのである。さらに、この「魚」の中で様々な種類を区別する必要があれば、それらもまたその特殊性を把らえて、「鮒」「鯉」「鯖」「鯖」などとそれぞれ異なった名称を与えていく。これは抽象から具体への認識の発展で、いわば小さな入子が生まれていくのだが、反対に大きな入子にも発展する。「魚」や「鳥」や「虫」をひっくるめた、より普遍的な種類が「動物」とよばれ、そこに「人間」も入れられる。これに「草」や「木」をひっくるめたもっと抽象的な「生物」という名称が、「生物」と「無生物」をひっくるめた「物」という名称が、さらには観念的な存在をひっくるめて仮名書にした「もの」という名称が成立する。（「形容名詞『の』について」『試行四一』）

五、対象に基礎をおく（形式にとらわれない）ことについて

荀子は、すでに述べて来たことからも分かるように、言語の表現の基礎を、対象においている。先の「名無固實」ということも、その一つの表れであり、次のようなことばも、その反映と見ることができる。

雖共不爲害矣、知異實者之異實者莫不異名也、（六八一頁）

共なりと雖も、害と爲うざるは、實を異にする者の、名を異にするを知ればなり。故に實を異にする者をして名を異にせざること莫からしむなり。

一共名であっても混乱しないのは、実（対象）が違うものには、名称も異なるということを知っているからである。従って、実が異なるものには、すべて名称も異なるようにしなければならない。」

つまり、「實」（対象）によって「名」が決められるのであり、決してその逆ではないということである。

この言語の基礎を現実の対象に置くということで、興味深いのは、「數」を決める根拠について述べているところである。

荀子は、「數」を決める根拠について、次のように言う。

物有同狀而異所者、有異狀而同所者、可別也、狀同而爲異所者、雖可合謂之二實、狀變而實無別而爲異者、謂之化、有化而無別、謂之一實、此事之所以稽實定數也、（六八三頁）

物に狀を同じくして所を異にする者あり。狀を異にして所を同じくする者あり。別つ可きなり。狀同じうして所を異にすることを爲す者は、合す可しと雖も之を二實と謂ふ。狀變じて實に別なく異を爲す者は、之を化と謂ふ。化あっ

て別なきは、之を一實と謂ふ。此れ事の實を稽へ數を定むる所以なり。

〔物には形状が同じであっても、その存在する所が違っているものや、形状が違っても同じ所にあるものとがあるが、これは区別すべきである。形状が同じで場所が違うものは、これを一つの名称に表わすことができるが、実質は二つである。形状が変っても、実質は同じで、しかも名称の区別をするのは、化という現象である。化があっても、実質に違いがなければ、一つである。これが、事物において、実際の対象を考えて数を決めるための根拠である。〕

「狀同而爲異所者、雖可合謂之二實、」というのは、楊倞の注によれば、「二匹の同じ形状の馬が、別の場所にいる場合、両方とも馬というが、実際は、二匹である。」ということであるが、ここは、次のような、武内義雄博士の説明が分かり易すい。

同じく犬といっても、甲の犬と乙の犬とは別であるが如きである。

（『中国思想史』一〇〇頁）

乃ち、これは、言語は形式が同じであっても、内容は異なる場合があるのであり、形式より内容（その基盤は対象）が優先するのであって、形式に引きずられてはいけないということになるであろう。別の言い方をすれば、語彙としては同じであっても、言語としては異なるということでもあろう。

又、「有異狀而同所者云々」というのは、注によれば、「一人の人間が、幼児から老人へ変化するような場合」のことであり、つまり、対象が同じでも、どの側面を取り上げるかによって、その表現形式も異なってくるということであろう。このことも、言語の大きな特徴の一つである。

一つの事物は、いろいろな側面、いろいろな関係を持っていますから、どの関係をとりあげるかによって、同じ事物でありながら表現がちがってきます。ある人間を、その肉体的な性質から、「重い病人だ」ともいい、また過去の行為から「殺人犯人だ」ともいいます。

（『日本語はどういう言語か』四三頁）

同じ対象を取扱っても、「お湯があつい」というように静止の状態でとらえる場合（形容詞）、「お湯がわく」と、変化の過程を把えて表現する場合（動詞）の違いなども、この類である。

いずれにしても、言語は、その表現の形式に拘わられてはならず、あくまでも、対象が基礎であり、対象の構造をみつめて、その内容を把握していかなければならないことを、荀子は「數」の決め方を通して教えてくれるのである。

六、その他

荀子は、以上述べてきたもののほか、「文」と「単語」の関係や、方言と標準語の意識についても、若干触れている。

名也者、所以期異實也、辭也者、兼異實之名、以喩一意也、

（六八六～六八七頁）

名なる者は、實を異するを期する所以なり。辭なる者は、異實の名を兼ねて、以て一意を喩らしむなり。

［名称（この場合は「単語」ととれる）は、対象を区別することを目的とするものであり、辭（「文」ととれる）は、様々の名称を合わせて一つの意味を理解させるものである。］

これは、「文」とは「単語」の集合ということである。（この場合の「名」と「辭」については、「単語」「文」と把らずに、「実詞」と「虚詞」とも見れるが、そのことに関しては、『現代言語学批判』（頸草書房、一九八一年九月刊）所収の拙稿「中国人は語をどのように分類してきたか」を参照されたい。）

方言と標準語の意識については、次のように述べられている。

散名之加於萬物者、則從諸夏之成俗、曲期遠方異俗之鄉、則因之而爲通、

（六七一～六七二頁）

散名の萬物に加ふる者は、則ち諸夏の成俗に從って、遠方異俗の鄉にも曲きに期はせ、則ち之に因って通ぜしむ。

［万物につけられる普通の名称は、中国の一般習俗に従った上で、遠方の異なった風俗の土地にもよく適合するように定め、それをもとにして通用させていくのである。］

乃ち、「中国」のことばを、「標準語」とするということであろう。

むすび

以上、荀子の言語論について、大まかに見て来たが、荀子にあっては、言語のもつ基本的且つ重要な特徴が、経験的にほぼ把握されていたということができ、現代においても十分通用する内容をもつ言語論が、実に二、〇〇〇年も前に登場していたということは、注目すべきことである。特に、「言語」と「対象」との関係や、「言語」と「人間の認識の発展過程」の関係などは、現代の構造主義・形成主義、或るいは機能主義の言語論より、数段も優れたものであるということができるのである。このような高い水準をもった言語論が、一体、後世に、いかなる形で継承されていったのか、或るいは消滅してしまったのか、といった点に関しては、今後の課題としておきたい。

一九八〇年八月一五日／一九九五年九月改稿

参考文献

内田慶市「中国人は語をどのように分類してきたか」（三浦つとむ編『現代言語学批判』勁草書房、一九八一所収）

内山俊彦『荀子―古代思想家の肖像』（評論社、一九七六）

三浦つとむ『日本語はどういう言語か』（講談社、一九七六）

〃　『こころとことば』（季節社、一九七七）

〃　『認識と言語の理論』（一部～三部）（頸草書房、一九七一）
〃　『言語学と記号学』（頸草書房、一九七七）
〃　「形式名詞『の』について」（『試行41』試行社、一九七四）
時枝誠記『國語學原論』（岩波書店、一九六八）
〃　「國語學史」（岩波書店、一九七〇）
宮下真二『英語はどう研究されてきたか』（季節社、一九八〇）
武内義雄『中国思想史』（岩波書店、一九七六）
荊公晩「談荀子的〝語言論〟」（『人民日報』一九六二年八月一六日）

〈付記〉

本稿は刊記にも示したように、今から約一五年前に書かれたものであり、本来『寺岡龍含博士古希記念漢文學論集』（福井漢文学会編）に収められることになっていたものである。すべての原稿は校了し、すでに上梓を待つばかりになっていたのであるが、出版社との間で最終段階での調整がつかずに、結局、今日に至ったというのが事の経過である。

寺岡先生は、私の大学時代の恩師であり、先生に巡り会うことがなければ、恐らくは、今の私はないと断言できる。国語学を専攻するつもりで大学に入り、偶然、第二外国語に中国語を選択したことが、寺岡先生との出会いであった。中国語の勉強を進めていくうちに、中国、中国学への興味が深まり、結局、現在の「中国語学」への道を歩むようになったわけである。当時、寺岡先生は、毎年、夏期休暇、冬期休暇中に、他大学からその道の第一人者の先生方を非常勤で招かれて、集中講義を開設された。受講生は今から思えば実に贅沢なことであるが、いつも、多くて五名程度、大体が二、三名であり、時には私一人のこともあった。その時は、「しんどい」思いをしたが、現代中国語から古典中国語（漢文）まで、また語学、文学、哲学に渉る広い「中国学」の勉強をする機会を与えられたことに感謝している。

先生は、まことに「頑固一徹」な人であった。漢字の一点一画をもおろそかにはしなかった。「こんべん」の一画目は必ず「横」に引かないと「校了」にはされなかった。私の卒論には、至る所、先生の独特な字での朱が入っている。（文字が誤っているからではなく、「てん」や「はね」が不正確だからである）

大学院修了後、福井大学に奉職してからも、時々お会いしてご指導を仰ぐことが出来たが、関西大学に移ってからはその機会もほとんどなくなっていた。昨年の春頃、先生が白血病で入院されたと聞き及び、敦賀女子短大に出講の折り、病院までお見舞に上がった。私が勤務先のことや、最近の研究課題などを話すと「しっかり、やってください」と励まして下さったが、何故か涙もろくなられたのが気掛かりであった。先生のご不幸を知らされたのは、その年の暮れであった。丁度、私が夏休み

中、中国に行っていた時であったと聞かされて、最後のお別れも出来なかったことが悔やまれてならない。

本稿は先にも述べたように、一五年も前の、二〇代後半の頃の、未熟な論考である。テーマや問題意識は今も変わりはないが、その方法論には大きな欠陥があり、大幅な修正が必要ではあるが、現在は別のテーマ（「西洋東漸」と近代中国語）に集中しており、全面的な修改作業を行えない状況である。ただ、そのままにしておいてはやはり先生に申し訳ないという気持ちがずっと心に残っており、今回、最小限の字句の訂正にとどめて「敦賀論叢」に掲載させて頂くことにした。掲載を承諾して頂いた編集委員の方々に感謝申し上げる。

寺岡先生のご冥福を心よりお祈りする次第である。

合掌